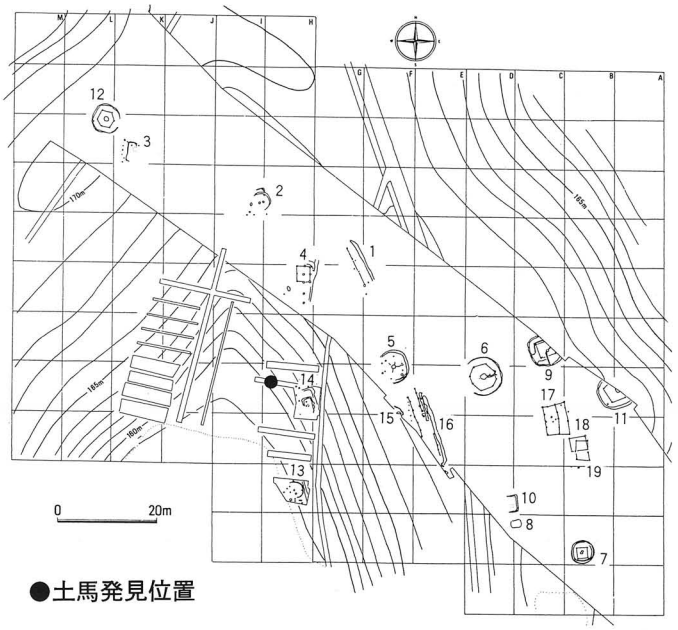
土　　の　　馬

中　山　俊　紀

1975年の紫保井遺跡の調査で、小型の馬形土製品が発見された。古代の「土馬」と呼ばれる遺品である。

紫保井遺跡は弥生時代の集落遺跡として知られているが、この調査では、古墳時代や奈良時代の土器片なども斜面部分を中心に多く発見された。石群中から発見されたやや柔らかい須恵質の土馬は、おそらく７、８世紀に作られたものであろうが、他に土器片など土馬の作られた時代を限定する遺物は、その石群中からは発見されなかった。



第１図　紫保井遺跡構配置図（縮尺1／1500）

発見された土馬は、遺存部全長13㎝、胴部の厚みが５㎝ほどで、頸から上及び四脚は欠損し見あたらなかった。中空の作りで、尾部基部下に小孔が貫通している。背部には鞍様のものを乗せていたためか、２箇所に帯状の剥離の痕をとどめている。腰部に「尻がい」を表現したのであろう篦で描いた線が２条、鞍部端から尾基部に向け描かれている。全体として、馬具を装着した馬体を表現していたことは確かである。

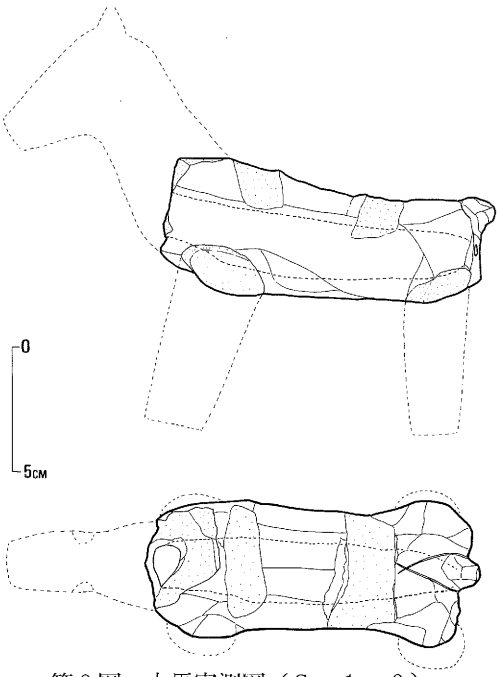
美作地方では、津山市総社の美作国府跡から８世紀後半に属するとみられる土師質のものが発見されている（註１）以外、発見例を知らないが、この種の土馬は中部地方から九州地方まで広域で発見されており、その多くは６世紀から８世紀に作られたものとされている。

それらには、土師質のもの、須恵質のもの、あるいは馬具を装着したもの、裸馬の状態のもの、具象的な表現のもの、稚拙な作りのもの等の区別がある。

その用途については、溝や古墳の周濠などから発見されるものがあり、紀記などの古文書の類似記事から、水神と関わる晴雨の祭りに用いられたものであると古くから考えられていた。

近年水野正好は、「馬・馬・馬」と題する論文で（註２）、土馬の発見状況や出土土馬の遺存形態の類型化に基づき、７世紀と８世紀の間に土馬使用の背景に大きな変化のあったことを推定している。

水野は、飾り馬と裸馬の差に着目し、7世紀代の土馬は鞍や馬具を粘土や線描で表現した飾り馬であり、平城京などで発見された8世紀代の土馬は裸馬であって、その差は時期的な違いを示すものであると解釈。また7世紀代の土馬は単体、欠損状態で発見され、必ずしも水との関わりをもたない物も多いとする。



第2図　土馬実測図（S＝1：3）

さらに8世紀代の土馬は、都城や国府、郡衙といった行政機構で主として発見され、多量使用、形態統一、溝などの水みちでの使用などの特徴をもつことから、それらは官制に沿って成立したものであると推測し、「大祓」の中にこそ位置付けられるべきものとし、一方、7世紀代の土馬については土着的要素の強いものであることを推測し、「肥前風土記」の「左喜川の川上に荒神が居り往来の人々の半ばを殺すといった所業をなすので、県主などの祖大荒田が土蜘蛛大山田女、狭山田女の教えにより下山田の土をとり人形、馬形を作り、荒神を祭ったところ神の和むところとなった」という伝承記事を引用して、荒神の祟りをしずめる祭式に広く用いられたと推論する。

紫保井遺跡出土の土馬は、水野説との関連でいえば、水との関わりの薄い場所で発見されており、飾り馬で、四脚・頸部以上を欠損し、単体発見である点から、7世紀代のものとされる土馬の特徴に一致する。散在する石群から発見された状況からみて、それはいかにも神しずめの祭りの後に遺棄されたもののようにもみえる。

従って水野説にたてば、7世紀のころ紫保井の土馬発見場所には、村人や旅人に多いなる災いをもたらす荒神がひそみ、人々に恐れあがめられていたことになる。

1,300～1,400年の後にひょっこり顔をのぞかせた朽ちた馬形でも、そのいななきに静かに耳を傾ければ、遥か昔、「もうりょう」の世界に生きた人々の、嘆き悲しみを静かに受けとめることができるかも知れない。

(註1)岡田　博「官衙」『吉備の考古学的研究』山陽新聞社 1992年
(註2)水野正好「馬・馬・馬－その語りの考古学」『文化財学報第二集』奈良大学文学部文化財学科 1983年